

近代統計の系統的数量化とカテゴリーの内的な限界 —— 日本における明治・大正期人口統計の場合 ——

岡 本 裕 介

はじめに

日本における全国規模の人口センサス(国勢調査)は、1920(大正9)年に初めて行なわれた。それまでは戸籍簿データの集計(以下、「戸籍業務による統計」)が、全国規模では唯一の人口調査だった。戸籍業務による統計は、近代統計学に親しんだ者の目から見れば、不正確なものでしかない⁽¹⁾。しかし当初は、多くの関係者がそれで十分と考えていた。近代統計学は、かつて社会にとって過剰な何かだった。

本稿では、前近代的な統計は科学として不十分で誤謬に満ちており、近代統計学は正確で科学的である、というような対立の構図をいったん棚上げにし、以下の点を論じたい。

1. 統計の近代化は単なる科学的進歩ではなく、社会の変化に即したものであること。
2. それは特に統計に用いられるカテゴリーに対する視点、具体的にはカテゴリーの境界づけにおいて変化していること。

まず、日本において近代統計学が徐々に覇権を握り、社会的な文脈の中に収まっていく過程を追い、そこで統計カテゴリーの扱いがどのように変わっていくかを見て行きたい。

1 明治大正期人口統計の概要

まず国勢調査導入までの人口統計の概要を確認しておく。⁽²⁾

(1) 宗門人別帳と戸籍業務による統計

江戸時代には「統計」という概念はなかったが、幕府の切支丹禁制政策に伴って作成された宗門人別帳が、人口統計と戸籍の役割を果たすようになった。その把握の仕方は、1. 身分別、2. 支配別、3. 各地の慣習に従うという特徴をもつ。1は、登録対象が平民階級のみで、同じ地域に住んでいたとしても武士は別系列(士籍法)で登録されるということ、2は、把握が地理的な編成によるものではないため、複数の領主による支配を受ける地域では、人口が重複して記録されうることを意味する。3は、たとえば新生児を何歳から記載するか、婚家に入った女をいつから記載するかなど、各地に慣習の相違があるということである。結果的に「人口」というカテゴリーの定義は地方によって異なり、集計結果はそれだけ不確かなものとなった。

明治のごく初期の間は、宗門人別帳とほぼ同じ形式で戸籍が編成されていた。しかし、1871(明治4)年、政府は太政官第170号布告により「府県一般戸籍ノ法」(「戸籍法」)を定めた。この戸籍法に基づき、翌1872(明治5)年1月29日現在を調査時点として「戸口調査」が実施された(ただし、調査そのものは全国一斉ではない)。このとき作成された戸籍は、その年の干支にちなんで「壬申戸籍」と呼ばれる。

この戸籍法では、1. 身分制度は廃止されたが、2. 領主支配権を単位とする方式は存続した(当時、「県」は地理的区分ではなく、旧領主の支配領域を呼び換えたものだった)。また、3. 新生児を記載しないといった慣行は否定され、条文の上では、「人口」の定義は一律となった。

しかしこの定義の一律性は、実際の調査には反映されなかった。慣行は

庶民の間で根強く生き続け、就学年齢になって初めて届けられるといった例も珍しくなかった。また、当初、新たな調査区(戸籍区)が設けられたが、うまく機能せず、旧村をもとにした「行政村」ごとに人口把握が行なわれるようになった。したがって、実際には旧来の慣行が行なわれていた可能性がある。

この戸籍と欧米などで用いられている身分登記システムとの最大の違いは、全体数を容易に把握できるようになっていたという点である。つまり、初めから全国規模の人口統計が行なえるような仕組みになっていた。戸籍簿は5年に1度更新し、その中間年では、出生死亡・転入転出の加除により人口を把握しようとしていた。通常の戸籍としての記載のほかに、年齢別人口、職業(身分)別人口、出入り寄留人員などを集計し、静態調査と同時に動態調査を行なうものとされていた。

このように明治の戸籍は、宗門人別帳と比べて、より体系的になっていたが、それでもまだ現代の人口統計の常識とは異なる部分があった。特定の具体的な目的を念頭に組まれているということも、その1つだろう。それは年齢の表記にも現れている。年齢は学齢(14歳以下)と兵役年齢(男性のみ21歳以上)および60歳以上の階級区分が設けられた。

また、調査単位は「家族」となっていた。「家」には戸主が定められ、戸主が「家」を代表し、一切の権限と責任を負っていた。「家族」の変動はすべて戸主を通しての届出となった。本人の家族所在地において調査が行なわれるため、世帯構成員から非家族員を除き、さらに家族外にある家族員を加える。不在者を含めた調査であるため、調査漏れを引き起こす原因ともなった。

作業が煩雑になるというのも、現在の人口統計とは異なる特徴だろう。戸籍簿を基礎とするために、5年に1度、戸籍と現在人員を照合しなければならず、その間、増籍を停止しなければならなかった。

(2) 国勢調査

不正確さや煩雑さを理由に、戸籍業務による統計を廃し、日本で早期に個票による全数調査(センサス)を実施しようという動きは早くからあった。活動していたメンバーはドイツ社会統計学の影響を受けており、その中にはたとえば明六社の杉亨二がいた。

杉は1872年の時点で太政官政表課大主記だったが、政府の実質的な中央統計機関は、戸籍を扱う大蔵省統計寮にあった。センサス型調査実施の必要性を上申したりもするが、すぐには受け入れられなかった。また、スタチスチック社という統計団体の創設に関わった。その後、国勢調査実施に向けて様々な行動を起こしたのは、やはりこのスタチスチック社や、東京統計協会といった民間団体だった。

杉は1879(明治12)年、山梨県で全国人口センサスの予備調査ともなるべき調査(甲斐国現在人別帳)を行なっている。戸口調査や他の当時の官庁統計が「表式」であったのに対し、山梨県のこの調査では「家別表」(すなわち調査票)が用いられた。戸口調査の「職分表」では、職業、身分、産業という異質の概念が混在していたが、これらが幾分合理的に区分された。年齢も1歳刻みの満年齢が記載された。

しかし、この後、即座に全国レベルの調査に移行することはできなかった。もちろん、財政上の問題(高橋 1941 : 39-40)という説明は可能だが、加えて、熟練した統計職員の不足という問題もあげられるだろう。厳密な定義もなく村ごとに実施されるそれまでの人口統計とは異なり、センサス型の調査は、厳密な定義を理解でき、かつ訓練された調査者が、膨大な数だけ必要とされた。

1883(明治16)年には、民間の統計教育機関「共立統計学校」が設立されたが、わずか3年で廃校になった。しかし、高等教育機関で統計学講座が開設され、初等・中等教育機関でも統計教育が行なわれ始めた。また、行政機関や農会、学校、監獄、裁判所、鉄道などの各種機関、銀行、新聞社等の統計調査担当者を対象とした統計講習会がたびたび開かれるようにな

った。

こうした統計学教育と並んで、訓練された調査者の育成に貢献したのは、国勢調査が実施される以前、各地で行なわれた地方人口センサス、農商務系のセンサス(家禽調査、麦作付調査など)、町村是調査だった。人口統計には必然的に具体的な調査が伴うため、座学だけで即座に実施が可能になるわけではない。後の格段に大規模な国勢調査が、さしたる滞りもなく実施できたのは、こうした諸々の調査が先行していたことが大きい。

人口センサス実施への見通しが具体化し、「国勢調査ニ関スル法律」が公布されたのは、1902(明治35)年だった。この法律のもとで、1905(明治38)年に第1回国勢調査が予定されていたが、相次ぐ国会の解散と1904(明治37)年の日露戦争のために延期された。民間統計団体からの建議や支援などがあり、1920(大正9)年ようやく実施された。

第1回国勢調査は、1920年10月1日午前0時の現在人口を調査するものとされた。調査では、世帯ごとに「国勢調査申告書」が配付され、成員の氏名、世帯主との続柄、性別、年齢、夫妻の有無、職業、出生地、民籍(朝鮮・台湾・樺太・アイヌ人であるかどうか)、外国人は国籍が記入された。

(3) 人口学的関心

なぜ、戸籍業務による統計が近代統計学に基づく国勢調査にとって代わられたか。たとえば、統計調査技術や統計学それ自体の発展として説明されることがある(鮫島 1971)。また、近代日本における社会・経済の発展段階を前提として、社会がそれに見合った精度の統計を必要とするからという説明もありうる(たとえば、上杉 1974; 藪内 1995; 金子 1998など)。いずれも、正確な統計が必要とされ、その結果、伝統的な統計ではなく近代統計学が導入されたという前提をもつ。しかし、これですべてを説明し尽くしているわけではない。事態はもう少し複雑だ。

まず念頭においておかなければならないのは、佐藤(2002: 47)も言うように、少なくとも、徴税、徴兵、学事などの行政が、戸籍による人口把握

に基づいてなら支障なく行なわれていたと考えられる点だ。

そのため、伝統的な統計を知っている識者には、200年来問題なく行なわれてきた作業に、いまさらあらためて多額の費用をかける意義が理解できなかった。しかしそれ以上に、センサスの意義は、当時の人々にとってそれほどスムーズに理解できるものではなかった。杉亨二ですら、当初は、たとえば人口が割合で表わされるということに違和感をもったと言う(世良 1902 : 18-9)。

センサス推進派はそこで、当時の人々を説得するため、手の込んだ方法を使わざるを得なかった。たとえば、“population census”は当初「人口調査」と訳されていたが、やがて「民政調査」、「国勢調査」と称されるようになった。こうした名称は、アメリカのように経済調査を含むように見える。しかし、それでは作業量が膨大になるため、第1回国勢調査では純然たる人口調査となった。

また、同じく説得の論拠として、欧米ではどこも人口調査を行なっているから、というものもあった。⁽³⁾人口調査が実用的な目的をもつとしても、幾分かは「近代国家の証し」というような外見の問題でもある。

すでに述べたように、1905年に予定されていた第1回国勢調査は、日露戦争を理由の1つに、延期された。戦役のために、全国の人口職業の状態が平常時と異なるから、調査時期として不適當ということだった(総理府統計局 1976 : 554)。しかし、1917(大正6)年には、逆に軍事上の必要性から国勢調査実施が説かれる。当時、内閣統計局長だった牛塚虎太郎は、参謀総長の上原勇作宛に意見書「国勢調査ノ軍事上必要ナル所以」を提出し、主として戦時動員のために、国勢調査による人口状態の把握が不可欠であると述べている。表向きの理由とは別に、近代統計学へと覇権を移す流れがあるように見受けられる。

国勢調査実施を推進していた統計家は、戸籍不信の理由をどこに求めていたか。佐藤(2002 : 48-85)によれば、最大の問題は出入り寄留⁽⁴⁾の不備にある。人々は一時的に自分の本籍地以外に住居を移しても、寄留届を出さな

いことが多かった。そのため、戸籍による人口データは、年代が下るにつれて不正確になる傾向があった。

この誤差はどの程度のものだったか。『日本帝国統計年鑑』(国勢院 1921 : 4-5)で行なわれている計算式にしたがって、出入り寄留の誤差を相殺し、1918年の推計人口を算出すると、約5565万人となる。これに人口増加の年率をかけて1920年末の人口を推計すると、約5686万人である。1920年の第1回国勢調査の結果判明した1920年10月1日現在の内地の総人口は約5596万人だった。誤差は約90万人で、国勢調査人口の約1.6%に値する。佐藤(2002 : 52)のように、かなりの的を射た数値であると評価することもできる。

確かに人口学的関心からすれば、大きな誤差であるが、裏を返せば、この人口学的関心こそが問題になる。少なくとも、徴税、徴兵、学事⁽⁵⁾などの行政は、戸籍による人口把握に基づいてなんら支障なく行なわれていた。こうした意味での「実用」以上の何かが、近代統計学への流れに働きかけていたと考えられる。

即座に考えられるのは、同時期に必要とされた「国民」(nation)という共同体のあり方だろう。次節でこの点を検討しておこう。

2 ナショナリズムと系統的數量化

伝統的な人口統計をもち、それが近代化するという動きは、決して日本固有のものではない。ここで同時代の、特にアジアの植民地世界の人口統計を見ておきたい。

ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』改訂版で加えられた付論「センサス、地図、博物館」によると、アジア、アフリカの植民地世界における公定ナショナリズム(つまり、支配集団が提供するナショナリズム)は19世紀ヨーロッパの王朝国家のそれをモデルにしたのではなく、直接の系譜は植民地国家の想像の仕方(imaginations)自体に求められるべきであると言う(Anderson 1991=1997 : 274)。このことを最も浮き彫りにするのは、セ

ンサス、地図、博物館という、権力の3つの制度であり、これらが「植民地国家がその支配領域を想像するその仕方——その支配下にある人間たちが誰であるかというその性格付け、その領域の地理、その系譜の正当性——を根底的に形作った」(Anderson 1991=1997: 274-5)。

海峡植民地・半島部マラヤのイギリス植民地人口調査者について研究している社会学者のチャールズ・ハーシュマンは、19世紀末から最近まで、一連の人口調査においてどのような「アイデンティティ・カテゴリー」が使われたのかを調査した。その結果、植民地時代の進行とともに、人口調査のカテゴリーがより明白に、より排他的に、人種的となり、そしてそれは独立以降も維持されることが見いだされた(Hirschman 1986)。

しかし、アンダーソンによると、植民地国家のこうした想像の様式は1870年代よりもずっと前に生まれたものである(Anderson 1991=1997: 277)。当時の人口調査者がもたらした真の革新は、民族・人種の分類の構築にあったのではなく、むしろその系統的な数量化にあった。マレー・ジャワ世界の支配者たちは、植民地時代以前も、租税台帳、徴募台帳によって支配下の住民を数えようとした。これらの台帳の目的は、明確かつ具体的であり、それは徴税、徴兵を効率的に実施するために住民を捕捉しておくことだった。したがってこれらと無関係な「女子供」は常に無視された。

しかし1850年以降、植民地当局は、女子供を含めすべての住民を、直接的にはなんら具体的な目的もなく数えるようになった。これにより、住民、地域、宗教、等々、国家が直接支配するしないに関わらず、すべてのものが原則として数えることができるようになる。世界は複製可能な複数になると前提され、いかなる中国人も「中国人」というシリーズを暫定的に表現したものと見なされる。そして、いったんこうした民族・人種的な「想像の地図」が醸成されると、国家はそれをもとに教育や司法といったさまざまな機構を編成した(Anderson 1991=1997: 281-2)。

第1節で述べたように、日本でも1871年の戸籍法では、学齢、兵役年齢といった階級区分が設けられ、性別ごとに階級間隔が異なっていた。アン

ダーソンの言う意味での系統的数量化は見られず、むしろ具体的な目的と結びついていた。そしてこの点は、近代統計学に基づく、たとえば「甲斐国現在人別調」では改められ、満年齢で記されるようになった。

「夷狄」の脅威にさらされた、当時の明治藩閥政府は、政治的正統性を早急に調達しなければならなかった。そこで、プロシア・ドイツの公定ナショナリズムをモデルとし、天皇を中心とした公定ナショナリズムを構築した。統計の近代化も、ナショナリズムとの関連で理解しなければならぬ。

近代統計学がもつ想像の様式は、文化システムとしての近代ナショナリズムがもつそれと不可分の関係にある。この点は、近代の「国民」とは異なる共同体と比較することによって、より明らかになる。

たとえば、国家主権が神によって王に与えられると見なされていた「王国」という共同体ではどうであったか。アンダーソン(Anderson 1991 = 1997 : 43-7)によれば、王国では、王権を中心として、すべてがその周囲に組織されたが、国境は不明瞭だった。これに対し、国民が主権をもつ近代国家では、国境は明確で、主権はその隅々まで均等に作用すると見なされるようになった。この「明確」⁽⁶⁾、「均等」といった特徴は、時間の了解においても明確に現れている。

センサス、地図、博物館が照らし出すのは、こうしたナショナリズムに連なる考え方だった。先に系統的数量化として言及したこの考え方は、アンダーソンによれば2つのものから成る。

この考え方の縦糸をなしているのは、すべてをトータルに捉え分類する格子(grid)であり、これは果てしない融通さをもって、国家が現に支配しているか、支配することを考えているものすべて、つまり、住民、地域、宗教、言語、産物、遺跡、等々に適用できる。そしてこの格子の効果はいつでも、いかなるものについても、これはこれであって、あれではない、これはここに属するものであって、あそこに属するものではない、と言えることにある。それは境界が截然と区切ら

れ、限定され、したがって、原則として数えることができる。……
(中略)……。またこの考え方の「横糸」はシリーズ化(serialization)ともいうべきもの、つまり、世界は複製可能な複数からなるという前提である。特定のものはつねにあるシリーズを暫定的に表現しているにすぎず、またそうしたものとして扱われる。植民地国家がいかなる中国人よりもまえに「中国人」のシリーズを想像し、いかなる国民主義者も登場するまえに国民主義者のシリーズを想像したのはこのためであった(Anderson 1991=1997 : 299-300)。

支配対象を網羅的かつ相互排他的に分類する格子があり、そしてその格子にあてはまるシリーズの一つとしてすべてを見るという前提がある。近代統計学は、ナショナリズムの要請であるこうした前提の上に立っている。『想像の共同体』にしたがえば、第1節で述べた、近代統計学が求める「実用以上の何か」とは、「国民」の想像という、また異なる水準での実用性ということになる。

ところで、アンダーソンはこうした前提は「フィクション」であると言う。「アイデンティティが複数あったり、政治的に「おかま」であったり、あいまいであったり、あるいは変化したりするのを人口調査者は容赦しない」(Anderson 1991=1997 : 277)。たとえば混血は、「マレー人 8 分の 1, 中国人 8 分の 7」であっても、「マレー人」、「中国人」いずれかのカテゴリーに恣意的に分類された(Anderson 1991=1997 : 309 : 訳注(三))。あるいは「その他」というカテゴリーが、こうした恣意性を隠蔽することに役立つかもしれない。

しかし、これは問題を解決することにはならない。系統的数量化を前提とした近代統計学は、より根本的にフィクショナルな性質をもつ。次節でこの点を論じる。

3 カテゴリーの内的な限界

ここではジョアン・コプチェク⁽⁷⁾の『わたしの欲望を読みなさい』(Cop-
jec 1994=1998)を取り上げてみよう。⁽⁸⁾ミシェル・フーコーらの歴史主義的
思考を執拗に批判するコプチェクは、ここでその一環として、社会統計に
関するイアン・ハッキングの議論を取り上げる。

ハッキングは「人々を作り上げる」の中で、人口統計が用いるカテゴ
リーに、人々がなぜか自発的にはまり込むようになるという現象について
論じる(Hacking 1986=2000)。統計カテゴリーは単に現実を写し取るだけ
でなく、カテゴリーが先あって、それが現実を作り出す場合がある。こ
うした考え方の典型はラベリング理論だろう。

ラベリング理論よりもずっと強硬な唯名論なら、どんなものでも単に名
前をつけるだけで現実存在し始めると考えるかもしれない。しかしハッ
キングはこうした現実離れした議論から距離をとり、フーコーに典拠を求
めながら、主体の構成を可能にする物質的・社会的条件⁽⁹⁾の重要性を説く。

ハッキングが描く「作り上げ」には、同性愛や多重人格など、様々なカ
テゴリーが含まれているが、ここでは彼の読み方を特徴的に示す例を取り
上げたい。サルトルの『存在と無』に登場する「カフェのボーイ」という
カテゴリーである。

彼の敏捷できびきびとした身ぶりは、いささか正確すぎるし、いさ
さかすばしこすぎる。彼はいささか敏捷すぎる足どりでお客の方へや
ってくる。彼はいささか懇懇すぎるくらいお辞儀をする。彼の声や眼
は、客の注文に対するいささか注意のあふれすぎた関心をあらわして
いる。

……(中略)……。

そこには、人間を彼があるところのもののうちに閉じ込める用心が
見られる。まるで、われわれは、その人間がその地点から逃げ去りは

しないか、彼が突然、彼の身分からはみ出し、彼の身分をのがれはしないかと、たえず心配しているかのようなのである(Sartre 1943=1956 : Vol.3, 177-8)。

サルトルの主人公は「カフェのボーイ」というカテゴリーに自発的にはまり込んでいる。ハッキングはこの自発性を重視する。単に命名するだけでそれにあてはまる人々が生まれるのではなく、人々がそのカテゴリーに自発的にはまり込むことをうながす様々な物や制度を考慮して初めて「唯名論」は可能になる。

ハッキングにしたがえば、あるカテゴリーにあてはまる人がいてそれを客観的に数値として写し取ることがある一方で、逆にカテゴリーが初めてあってそれにあてはまる人口があとから生み出されることもある。統計の客観性はある意味で否定されたことになる。しかし、カテゴリーそのものの客観性は疑問に付されなかった。

コプチェクの批判の論点は、まさにここにある。コプチェクによれば、「歴史主義者とは、社会をその内部に存する権力と知識のネットワークに還元する人々のことである」(Copjec 1994=1998 : 15)。しかし、社会には還元を妨げるもっと不確定的な要素がある。こうした要素を無視することで、かえってわれわれは権力や知識に、より救いがたく拘束されてしまうかもしれない。

コプチェクの議論を見る前に、先ほどのサルトルの引用をもう1度読んでみよう。主人公は確かに「カフェのボーイ」に自発的にはまりこもうとしているが、同時にそのカテゴリーからはみ出してしまわないか「たえず心配しているかのような」でもある。後者の側面の方が、よく知られたサルトルの実存主義のイメージと合致するはずだが、ハッキングはなぜか無視するのである。

問題は、なぜ「心配」する必要があるのかという点だ。答えは要するに、はまりこむべき「カフェのボーイ」の意味が確定できないということにある。ボーイらしくあらうとして行なったあるふるまいが、本当にボーイら

しいふるまいなのかどうかは、結局何によっても保証されない。誰かが「ボーイらしくなった」と判断したとしても、それは果たして信頼できるのか。ある場面でボーイらしいと見なせるふるまいが別の場面でボーイらしいと言えるのかどうか、またその2つのふるまいは果たして同じと言えるのかどうか、等々、「心配」の種は尽きない。

統計にかかわるカテゴリーにも、同じことが言える。たとえば、日本では第1回国勢調査の直前に行なわれた国勢調査評議会で、定住性のある水面を調査対象に含めるかどうかで議論になった(佐藤 2002: 133-4)。「日本在住」というカテゴリーが、そこで生活する人々を含むかどうか。カテゴリーがきわめて明快に定義づけられているように見えても、具体的な場面ではその明快性に限界があることが明らかになる。はたして当時、「日本在住」というカテゴリーは水上生活を含めることを想定していただろうか。むしろ、カテゴリーの意味は開かれており、使用するたびに新たに解釈され、意味とは絶えず解釈されることを通して存在していたと言うべきではないか。⁽¹⁰⁾

「日本在住」というカテゴリー(集合)に別の1人を付け加えることは「日本在住」という記号表現(シニフィアン)の解釈である。しかし、1人加わった新しい集合は、さらなる解釈を待つ記号表現でしかない。数を数えるという行為は、そのつどその行為自体の説明になっているが、その説明は依然として次なる説明を必要とする。行為の根拠づけは無限に先送りされなければならない。

しかし、これでは統計としては機能しなくなる。カテゴリーの意味を固定することができないとしても、統計に何らかの形で社会的な効力をもたせなければならない。それはいかにして可能になるのか。

ここでコブチェックの議論を見てみよう。アンダーソンが王国と対比することで国民国家を相対化したように、コブチェックは民主主義革命以前のカテゴリーをある形で措定したうえで、それと対比することで、革命以降の、すなわち現代のカテゴリーを逆説をはらんだものとして描いている。

コプチェックによれば、民主主義革命以前には、王の身体が国家の境界を定義づけ、そこに属する主体の集合を閉じていた(Copjec 1994=1998 : 210)。つまり、集合に属するものと属さないものの境界を決定した。これにしたがえば、当時、カテゴリーに社会的な効力を与えていたのは、王の身体だった。

王の身体は、カテゴリーを外側から限界づけている。コプチェックはこのような限界のあり方を「外的限界」と呼ぶ。外的限界をもつとき、カテゴリーは常に外部の誰かに依存している。こうした限界のあり方は、近代統計学では許されない。この点を、第1回国勢調査を指揮した、当時の内閣統計局長、牛塚寅太郎の述懐(牛塚 1955)をもとに考えてみよう。

牛塚によれば、正確な人口調査がなかった頃、悪い市町村長は議員の定員数を増やすために人口を水増ししていた。水増しは、入り寄留のチェックのみに力を入れることによって簡単にできたと言う。このようなやり方は紛れもない醜聞と映るが、それは近代以降のカテゴリーの見方によるところが大きい。われわれは誰かがカテゴリー(この場合は、人口を数えるべき市町村の境界)を定義することは認めるが、しかし、一度定義されてしまえば、それ自体として維持されるものとする。定義そのものが特定の誰かに依存していることを認めない。この場合、限界はカテゴリーの内部にある。つまり「内的限界」である。

外的限界は、近代に入り、民主主義革命を経て失われた。集合を閉じるために「限界」は必要だが、民主主義社会では特定の誰かがその位置を占めることができない。そこで集合は自ずから閉じているかのよう⁽¹¹⁾に扱われる必要がある。コプチェックも言うように、これは「政治におけるモダニズム⁽¹²⁾のもっとも根源的な問題の1つ」(Copjec 1994=1998 : 210)である。

ナショナリズムが要請する近代統計学の系統的数量化は、「内的限界」というある種のフィクションを伴う。近代統計学以前の日本の統計では、こうしたフィクションは機能していなかったし、必要でもなかった。たとえば江戸時代の宗門人別帳では、徳川幕府によって、各地の慣習に従った

把握をすればよいとされていた。この場合、限界は幕府や各地の領主の支配権によって、外的に与えられる。明治初期の、戸籍業務による統計も、この習慣を引き継いでいた。

4 近代統計のリテラシーの普及

近代統計学を支える内的限界がある種のフィクションでしかないとするなら、それはいかにして維持されているのか。当然ながら、それは内的限界があるかのように数字を書いたり読んだりする、独特のリテラシーの普及と関わっている。⁽¹³⁾ 内的限界が合理的に理解できるから誰もがそれに従って数字を読み書きするのではなく、逆に限界が内的であるかのように、誰もが読んだり書いたりするから、限界が限界として機能する。最後に、内的限界を言わば外的に支えるリテラシーの普及について論じておきたい。

まず、書き手である調査者についてはどうか。

人口調査はある程度の短期間で行なわなければ用を成さない。そのためには大量の調査者が必要になる。戸籍法では当初、これを旧来の社会的紐帯⁽¹⁴⁾を利用して行なおうとしていた。

しかし、近代統計学ではこうしたやり方は不十分と見なされる。単に大量の調査者を動員すればいいのではなく、彼らはすべて知識と技術をもっていなければならない。第1節で述べたように、共立統計学校のほか、府県レベルで繰り返し行なわれた統計講習会は、そうした調査者の輩出に貢献した。

調査における重要事項の1つは、カテゴリーの定義を厳密にするということだった。講習会でよく使われていたテキスト『統計通論』では、中央官衙と地方庁との、そして調査者と被調査者との「気脈の疎通」(コミュニケーション)を徹底することが推奨されていた(横山 1915: 92-3)。第1回国勢調査では、申告書のほとんどすべての文言に意識的な振り仮名がつけられた。⁽¹⁵⁾

コブチェックに従うなら、「気脈の疎通」が定義を厳密にすることはない。そうすると、近代統計学が大量の人資と物資を動員する様子は、サルトルのボーイの神経症的な振る舞いのようにも見える。振り仮名だらけの国勢調査申告書は、その徴候を象徴的に示しているのではないか。

しかし、何らかの意味で、統計は正確になっていくのだろうか。ここで言えるのは、少なくとも正確さには複数の基準があり、ある正確さのみが重視される傾向にあったということだ。

第1回国勢調査実施前の国勢調査評議会で、まさに「正確さ」の基準が議論されていた(佐藤 2002: 113-5)。第1回国勢調査は現在人口主義で行われることが決まっていた。これに対し、常住人口主義に切り替えるか、あるいは現在人口と同時に常住人口も調査すべきであるとする意見が出された。この対立はそれぞれ、中央政府とある地方の利害とを代表していた。現在人口主義のみの採用を擁護する論拠は、東京市その他のセンサスの経験から、両種の人口の差が非常に小さく、東京市の場合で4,000人程度だったことだ。これは現在人口の2%強に過ぎない。したがってわざわざ常住人口に切り替えたり同時に調査したりする意義はほとんどない。

しかし、大規模な「準所帯」(宿、下宿、病院など)が多い地域では、その差は数十%に及ぶ。地域ごとにきめ細かな政策立案を求められる立場であれば、この差は大きな意味をもつ。しかし、全国を見渡す立場としては、調査項目をできる限り絞らねばならず、これを優先させる限りで、両種人口の差は十分小さなものと見なされる。

評議会は結局、常住人口を調査するという主張を受け入れなかった。つまり、正確さの基準が、地域ごとの政策よりも、均一な国勢の表象に都合がいいように採用されたのである。

次に、読み方の普及という点を考えてみよう。佐藤正広は、国勢調査、特に第1回のそれは「国民統合の手段」という側面をもつと言う(佐藤 2002: 157)。この場合、統合とは、国民が調査に価値を見出すよう教化されるという意味であるが、そこには、近代統計学特有の読み方を身につけると

いう側面が含まれている。

読み方は、たとえば、統計の公表そのものによって普及しただろう。日本でも統計機関が発行する雑誌や一般の新聞などで、国勢調査も含めおびただしい数の調査結果が公表された。近代統計学が普及し始めると、まずこうした「数字の氾濫」が起こる(Hacking 1990=1999など)。

村上直之は、統計は公開されることによって「建物なきパノプティコン」として機能すると言う(村上 1995 : 139-94)。統計を読む人々は、かつての王(中央監視塔)の視座を占め、他の誰もが同じ視座に立つことを意識しつつ、自分が平均からいかに隔たっているかを見比べる。しかし、「数字の氾濫」によってまず普及するのは、中央監視塔の視座そのものだろう。この視座こそがまさに「内的限界」という、統計の特殊な読み方を含意している。

また、第1回国勢調査に際して調査者たちが行なった「書き方」の支援は、当時の人々が何を知らなかったかという点を明らかにしてくれるが、しかし同時に、近代統計の読み方がどのようなものであるかを理解するうえでも役に立つ。

時間を明確で均等なものとして了解する(注(6)参照)ことは、行政側の積極的な支援を要した。たとえば、当時は自分の誕生日を(つまり正確な年齢を)記憶しておくという習慣もなかった。そのため、農村の調査員の中には、戸籍原簿と照合して申告書をチェックする者もいた。

第1回国勢調査は現在人口の調査で、1920年10月1日午前0時現在の住所等を申告するものとされていた。しかし、ある時点の状態を記述するという感覚は、当時の人々の間では希薄だった。地方自治体などで、講習会、新聞、映画などを通して、日程や申告の方法などを早くから宣伝しただけでなく、当該時刻が迫ると号砲を鳴らしたり、東西屋が呼び声をかけたりした(以上、佐藤 2002 : 143-95)。

おわりに

近代統計学が求めていた、実用以上の正確さは、「国民」という共同体の創出に必要なものだった。その結果、人々は内的限界という不可能な要素をもつリテラシーを普及させてきた。

近代統計学に基づく国勢調査は、ナショナリズムやリテラシーの普及との関わりの中で正当性を得た、ということになるだろう。しかし、その正当性は、決して揺るがないものではなかった。

たとえばプライバシー問題を引き金とする人口センサス不要論がある（広田・暉峻 1987；山本編 1988；鈴木 1994；山本 1995など）。こうした主張が起こると、問題は単にプライバシー周辺に限定されず、そもそも人口センサスは必要なのかという議論にまで発展する。

山本によると、国勢調査反対の市民運動の主張は、日本には住民基本台帳や外国人の入国管理制度があるから国勢調査は不要である。これに対し自治体は、国勢調査は唯一の全数調査であり、正確であると答えるだろう。しかし、人口は刻々と変化しており、5年に1度しか行なわれない国勢調査を補うために、住民基本台帳その他を使って補正している。調査の内容によっては調査から公表まで4年もかかってしまう。さらに、近年はプライバシーなどを理由にした調査拒否が増大しており、標榜されている正確性がどの程度意味をもつのかは全くわからない。このような主張からすれば、国勢調査は再び社会にとって過剰な何かとなる。

国勢調査の現在の方法や、調査そのものの是非について議論の余地はあるだろう。しかし、ここで論じているのは、だから国勢調査には意味がないということではなく、知識が社会や技術的条件から独立して存在しえず、統計もその例に漏れないということである。

注

- (1) 松田(1948), 鮫島(1971), 上杉(1974), 藪内(1995)など。逆に, 戸籍業務による統計が, 従来考えられていたほど不正確なものでないと論じたものとしては, 佐藤(2002)。
- (2) 以下, 主として, 佐藤(2002), 藪内(1995), 川合(1991)によっている。
- (3) たとえば, 1886年, 東京統計協会の「人口調査草案」(総理府統計局 1976 : 193)など。
- (4) 寄留とは, 本籍を残したまま90日以上他地に滞在することで, 大都市への人口移動の増加に対応するために, 戸籍法で創設された。
- (5) 生命保険業界は, 例外的に正確な人口統計資料を必要とした。そのため, 1914(大正3)年, 国勢調査の速やかな実行を建議している(総理府統計局 1976 : 853)。
- (6) 中世の「メシアの時間」と対比される「空虚で均質な時間」(Anderson 1991=1997 : 47-62)。
- (7) 特に第7章「密室／わびしい部屋——フィルム・ノワールにおける私的空間」(Copjec 1994=1998 : 199-240)。
- (8) 詳しくは岡本(2002)を参照。
- (9) ハッキング自身は後に「マトリックス」と呼んでいる(Hacking 1999 : 10)。
- (10) 調査や統計が, こうした記号の性質をふまえたうえで論じられることは少ないが, たとえば佐藤俊樹(2000)によると, いわゆるエラボレーションも, 焦点は変数間の関係ではなく, 変数自体の意味である。つまり, エラボレーションの前後で変数の意味は変化しているのである。
- (11) 無限に続くはずの説明過程は, たとえば「等々, 以下同じ」という形で省略され, 説明は暗黙のうちに済まされたことになる。エスノメソドロジストなら, これを「エトセトラ条項」(*et cetera* clause)と呼ぶだろう(Garfinkel 1967 : 73)。
- (12) これがラカンの言う「対象 *a*」ということになるが, コプチェックは推理小説の普及と関連づける。近代統計のシステムは内的限界という要素を不可避免にもつが, 意識されない。しかし, 内的限界は密室のパラドックス(密室殺人)という想像力の中に回帰する。密室という条件から導かれる被害者の数は0人であるはずだが, にもかかわらずそこに1人の死体がある。数え上げには常に別の可能性がある。内的限界はその可能性を隠蔽する。
- (13) 以下, 数えることに関わる, いわば経験の主体の物質的・社会的条件を論じているが, 決して網羅的であるわけではない。他にたとえば, 大量の個票を印刷する印刷技術, にじまない(当時は舶来の)インキの使用(佐藤 2002 : 147)など。また, 科学人類学的な視点から図書館や博物館に収集されるデー

タを扱ったものとしてラトゥールの小論(Latour 1996=1999)があるが、そこで論じられていることは統計にもあてはまる。

- (14) 明治維新後の戸籍法で旧来の村請制に代わって、新しい末端組織、いわゆる「戸長-戸主の線」を設定した。しかし、戸長には旧来の村役人、戸主には「イエ」の主人が割り当てられることが多く、結局、戸籍の把握は古い社会的紐帯に大きく依存することとなった(佐藤 2002 : 197-8)。
- (15) たとえば、「文明的国家事業」には「ひらけたくにのしごと」、「準世帯」には「うちにたところ」など。

参考文献

Anderson, Benedict, 1991, *Imagined Community: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Revised Edition, London and New York: Verso. (=1997, 白石さや・白石隆訳『増補想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』NTT出版。)

Burchell, Graham, Colin Gordon and Peter Miller eds., 1991 *The Foucault Effect: Studies in Governmentality: With Two Lectures by and an Interview with Michel Foucault*, Chicago: The University of Chicago Press.

Copjec, Joan, 1994, *Read My Desire: Lacan against the Historicists*, Cambridge and London: The MIT Press. (=1998, 梶理和子・下河辺美知子・鈴木英明・村山敏勝訳『わたしの欲望を読みなさい——ラカン理論によるフーコー批判』青土社。)

Foucault, Michel, 1976, *La volonté de savoir (Volume 1 de Histoire de la sexualité)*, Editions Gallimard. (=1986, 渡辺守章訳『性の歴史 I 知への意志』新潮社)

Foucault, Michel (Collin Gordon, Ed.), 1980, *Power / Knowledge: Selected interviews & other writings 1972-1977*, Panteon.

フーコー, ミシェル, 2000 『ミシェル・フーコー思考集成VI セクシャリテ／真理』筑摩書房。

Garfinkel, Harold, 1976, *Studies in Ethnomethodology*, Cambridge: Polity Press.

Gellner, Ernst, 1964, *Thought and Change*, London: Weidenfeld and Nicholson.

Hacking, Ian, 1986, "Making Up People" in Thomas Heller, Morton Sosna, and David Wellbery (Eds.) *Reconstructing Individualism*, Stanford University Press, 222-236. (=2000, 隠岐さや香訳「人々を作り上げる」『現代思想』28-1, 114-29)

———, 1990, *The Taming of Chance*, Cambridge University Press. (=1999,

- 石原英樹・重田園江訳『偶然を飼いなす — 統計学と第2次科学革命』木鐸社。
- , 1999, *The Social Construction of What?*, Harvard University Press.
- 速水融, 2001, 『歴史人口学で見た日本』文藝春秋。
- 広田伊藤夫・暉峻淑子編, 1987, 『調査と人権』現代書館。
- Hirschman, Charles, 1986, “The Making of Race in Colonial Malaya: Political Economy and Racial Ideology,” *Sociological Forum*, 1(2): 330-62.
- 金子治平, 1998, 『近代統計形成過程の研究 — 日英の国勢調査と作物統計』法律文化社。
- 川合隆男, 1991, 「国勢調査の開始 — 民勢調査から国勢調査へ」川合隆男編『近代日本社会調査史(Ⅱ)』慶應通信, 105-41。
- 国勢院編, 1921, 『第39回日本帝国統計年鑑』(=1965, 復刻版, 東京リプリント)。
- Latour, Bruno, 1996, “Ces réseaux que la raison ignore: laboratoires, bibliothèques, collections,” in Marc Baratin and Christian Jacob (eds.), *Le pouvoir des bibliothèques: La mémoire des livres en Occident*, Édition Albin Michel, 23-46. (=1999, 田村真理訳「理性の知らないネットワーク — 実験室, 図書館, 収集館」岡田猛・田村均・戸田山和久・三輪和久編著『科学を考える — 人工知能からカルチュラル・スタディーズまで14の視点』北大路書房, 258-77。)
- 松田泰二郎, 1948, 「国勢調査発達史」高野岩三郎先生喜寿記念論文集編集委員会『高野岩三郎先生喜寿記念論文集1 インフレーション・統計発達史』第一出版, 133-222。
- Miller, Jaques-Alain, 1978, “Suture (Elements of the Logic of the Signifier),” *Screen*, 18(4), 24-34.
- 村上直之, 1995, 『近代ジャーナリズムの誕生』岩波書店。
- 岡本裕介, 2002, 「人々を作り上げることと縫合 — 社会的プロセスとしての統計学」『人間文化研究』8。
- Sartre, Jean-Paul, 1943, *L'être et néant*, Gallimard. (=1956, 松浪信三郎訳『存在と無』(第1分冊～第3分冊)人文書院)
- 佐藤正広, 2002, 『国勢調査と日本近代』岩波書店。
- 佐藤俊樹, 2000, 「1枚の図表から」今田高俊編『社会学研究法・リアリティの捉え方』有斐閣, 150-70。
- 鮫島龍行, 1971, 「発端期の統計 — 近代国家の成立過程と統計」相原茂・鮫島龍行編『経済学全集28 統計日本経済』筑摩書房, 3-5。
- 鈴木庸夫, 1994, 「国勢調査とプライバシー」堀部政男編『情報公開・個人情報保護〈ジュリスト増刊〉』215-9。

- 世良太一編，1902，『杉先生講演集全』横山雅男。
- 総理府統計局編，1976，『総理府統計局100年史資料集成 第2巻 人口 上』。
- 高橋梵仙，1941，「べい・まいゑつと氏の日本人口統計論」『統計集誌』721：39-40。
- 上杉正一郎，1974，『経済学と統計 改訂新版』青木書店。
- 牛塚虎太郎，1955，「国勢調査生たちの記」『統計』6(8)：22。
- 藪内武司，1995，『日本統計発達史研究』法律文化社。
- 山本健治編，1988，『プライバシー侵害』柘植書房。
- 横山雅男，1914，『増補統計通論全(第33版)』文昌堂。